

## 年報第二号を発行するに際して

年報創刊号を発行して早一年が過ぎました。この一年ほど歴史学がその存在意義を問われたときはかつてなかったように思えてなりません。戦後歴史学の「世界史の基本方針」を中心とした発展史観への懐疑はその極にすぎんだように思えます。普遍への懐疑はなにも歴史学だけでなく、あらゆる分野に現われています。

一九八〇年神奈川の一地方知識人が第一回帝國議會を前にして真の「政事家」は何かについて次のように語っています。「地図ヲ披イテ熟視スレバ漸ク粟粒大ノ小日本國ヲ見出サン、而シテ此小日本國ノ人民テフ觀念コソ真政事家ノ最モ大切ナル本意ナレ。然トモ真政事家タルモノハ亦博愛ナラザルベカラズ。彼ノ英米ハ奈何、独仏ハ奈何、露埃伊ハ奈何ト時々思想ヲシテ博大ナラシム可シ。是レ世界人民テフ觀念ハ善ク日本人民テフ觀念ヲシテ大ニ増育セシムル所アレバナリ」(『進歩』第二号)。自由民権の普遍論が後退を余儀無くさせられているときに、なお普遍への熱い思いに驚かされます。やがてこうした主張は大日本膨脹論によってかきけされてしまいましたが、現在の我々の置かれている状況は、大日本膨脹論ならぬ「經濟大國」日本の中に、かつて希求して止まなかった普遍への志向が埋没させられているように思えます。現在の日本国民が「大國」の枠組を問わなくなってきたのとあたかも照応するかのようには、歴史学が普遍への志向を鈍らせているようです。地域を媒介にした普遍への方向をどのように見出して行くのか、我々の課題の大きさをあらためて痛感する昨今です。

さて、年報第二号は、我々の一年間の活動を俯瞰するような構成となりました。

第一部は八七年一月二五日の第三回總會の記念行事―公開討論會「神奈川地域史研究の現状と課題」の問題提起と討論記録を収録し

ました。この討論會は今後の活動の方向を神奈川の地域史研究全体のなかで検討するために行ったものです。

第二部には県史を学ぶ会・各種勉強会の成果をまとめた論文を収録しました。伊東論文は県史を学ぶ会での研究をふまえて従来の五日市憲法草案研究にみられる主観的解釈を正そうとしています。奥田晴樹論文は勉強会「近代国家形成期の地域をめぐる諸問題」での報告で、大石嘉一郎氏の『日本地方行政史序説』の方法的検討を行なったものです。内田論文は勉強会「明治前期の地域と地方制度」での報告で、大島美津子氏の『明治のむら』の通説的誤謬の批判を試みています。

第三部は本会の初めての試みで、会員が一人一人得意あるいは関心のあるテーマで報告し、歴史認識の方法を鍛えることを目的とした連続講座「歴史に学ぶ」の報告レジュメを収録しました。

また、今年の夏、初めて会外から講師人の参加を得て催した公開講座「神奈川の歴史を学ぶ」の講演要旨とその時の受講者のアンケート記録も収録しました。

その他、地方史の研究と運動の現在の状況と今後のあり方を昨今の地方史論議に即して検討した奥田晴樹論文を収録しました。

京浜歴史科学研究会もいよいよ四年目に入ります。より一層充実した、社会との関係をより密にした活動を心掛けようと思っております。はなはだ勝手ですが、忌憚のない批判、助言がいただければと願っています。

一九八八年一月

京浜歴史科学研究会代表 内田 修道

